

東日本大震災から8年を迎えて

代表理事 小野武彦

未曾有の被害となった東日本大震災から8年を迎えようとしています。

海の彼方から次々と押し寄せる津波に多くの家屋が押し流され、引き波に地域全体が翻弄される様子が今でも目に焼きついています。加えて我が国全体を言い知れぬ不安に陥れたのは福島第一原子力発電所の事故でした。

以来、全国で地震をはじめとする自然災害が次々と発生する度に、応急復旧活動によって被災者の当面の生活は維持されるものの、東北地方を含めて本格復興には時間を要し、「コミュニティ」を再建することの難しさを考えさせられます。

昨年秋、宮沢賢治の郷里、花巻市を訪れました。この地を訪れるたびに、仏教信仰と農村生活に根差した作品の世界に浸り、安らぎを得ていたので、現在の復興状況を直接確かめたいと思ったのです。震災直後、関係機関の皆さんによる道路、港湾等の啓開活動や多くの方の努力により応急復旧が行われたことは被災地の皆さんに勇気を与えたことは間違いありません。そして、復興期間は2021年3月が目標ですが、今までの成果として特に道路、鉄道、港湾等社会インフラの復旧が高台移転をはじめとした地域の再建に寄与していることを実感しました。

地域の再建に欠かせないのは「生業の再興」です。皆さんの努力と共に全国からの支援の輪が広がりが続けたことが大きいのです。報道によると、現地に移住し、SNSで三陸の魅力を発信するなどして新風を吹き込み、水産業に従事している女性の活躍を知り感動いたしました。このような支えは無数にあるのです。

その一方で、現時点における避難者は全国で5.4万人、仮設住宅入居者は未だ1.2万人という現実があります。被災地で高台に造成した宅地の利用状況の低さには将来に対する不安を覚えます。発生以来、今後に向けた幅広い議論がなされ、それぞれの地域に相応した「事前協議」の必要性が提案されました。今では全国各地で自然災害の発生に備え「事前復興」として議論されています。

今、「少子高齢化」が避けては通れない事象です。このことを鑑みると、辛い判断ですが、人口減を直視することが大切です。元の状態をそのまま再現するのではなく、地域が連携した「コンパクトシティ」による新たな賑わいの創出が必要と思われます。簡単な事ではありませんが、限界集落の発生を防ぐためにもコンパクトな「分散型コミュニティ」を目指すことをも考えねばならないと思います。

今、地震、津波、火山だけでなく気候変動による自然災害も深刻さを増しています。地球規模での脅威として南米ペルー沖の海面水温が平年より高くなる「エルニーニョ現象」、低くなる「ラニーニャ現象」に起因するといわれる気象災害が多発しています。昨今世界で多発している山火事もその影響と指摘されています。

ポーランドで開かれた国連気候変動枠組条約第24回締約国会議（COP24）で「パリ協定」の実施方針を採択したとの報道がありましたが、今後の運用には厳しいものがあります。先進国だけに温暖化ガス削減を課した、「京都議定書」から新興国や途上国にも削減を求めた事で温暖化防止に向けて世界レベルでの機運は盛り上がりつつあります。

その一方で国家間の思惑の違いが実効性に影を落としており、異常気象や自然災害の頻発リスクが高まるのが非常に危惧されます。しかし、課題解決へ向けて世界の動きはベースロード電源としての原子力発電の必要性は認めつつ、その安全性の向上と再生可能エネルギーへのうねりは大きく、同時に私達の役割も期待されています。その活動は多岐にわたりますが、建設界では「ゼロエミッション」に挑戦していくことが定着しており、更なる進化と共に個人レベルでの取り組みの価値は大きいと思います。

この度、政府は「防災・減災・国土強靱化のための3カ年緊急対策」として官民合わせて総事業費約7兆円を投じることを閣議決定しました。重要な社会インフラ全般にわたる点検と早急な対応として160項目もの対策が網羅されておりますが、大切な事は、従来の施策との整合を図り、国づくりとしてのハード面での整備を着実に実施することです。

その一方で、一人ひとりが「備える」「守り合う」、ソフト面での重要性が広く共有されています。自分達が住んでいる「地域」を知り、例えばハザードマップの周知と活用が被害を最小にするという考えです。行政主導の災害対策には限界もあり、公助・共助・自助それぞれ一層の充実と協同が欠かせないのです。自分の生命は自分で守る時代である事を自覚し、自分はその為にどう行動するかを日常生活の中で考えておくことが重要です。災害はいつ、どこにやってくるか分かりませんから。

最後に皆さん!! 2018年の世相を表す漢字に「災」が選ばれました。多発した自然災害の発生、夏季の異常な暑さ等が主な理由と思われまふ。しかし、「災」は自然現象だけを指すのではなく、私達の生活全てに潜んでいるのではないのでしょうか。続発するおぞましい事件と共に本来は日本文化の美しい特徴でもあった「付度」の誤った解釈が、信頼をベースとする人間関係において気配りや思いやりが損なわれ、社会を不気味にさせている事が多いと思います。もしかしたら気がつかないでいた事があったかもしれません。多様化する社会のニーズに応えるために技術が高度化、専門分化した事は時代の流れとしてやむを得ない事ですが、その過程で技術者、組織の中の「垣根」「隙間」が指摘されて久しく、この事が大きな課題である事はおぼろげに感ずる。改めて、人・技術・組織の総合化を目指し、職域を越えた活動を心掛けることで、明るく楽しく営み続ける社会を目指しましょう。

人・組織・技術の総合化による国づくり

一人一人が**専門技術力**を高める

- ・技術者同志が同じテーブルで議論する
- ・他の組織に興味を持つ
- ・異分野に興味を持つ 政治、経済 etc...
- ・自分の住んでいる街を好きになる

自分の役割を自覚しつつ行動し、**おせっかい屋**さんに!!

行動半径を拡げる → 垣根・隙間の大半は埋まる!

人を育て、組織をつくり、動かすのが私たちの**責務!**